

注記：本論考は日本国際問題研究所の見解を代表するものではありません。

人民共和国における中国人対日協力者——山西省警務庁の事例

関智英

(津田塾大学学芸学部准教授)

日中戦争時期に日本に協力した中国人（漢奸）は、日本の敗戦後どうなったのか。本報告では日中戦争後に中国大陸に残った対日協力者の状況に迫らんとした。

これまでも対日協力者の戦後については漢奸裁判を中心に検討されてきた。古典的な成果としては毎日新聞東亜部記者だった益井康一の『漢奸裁判史』があげられる。2000年代には劉傑が『漢奸裁判』でこの問題を取り上げたほか、呉淑鳳、張世瑛、和田英穂、岩間一弘らが漢奸裁判について分析した。近年でも漢奸裁判について Yun が一書をなすなど、対日協力者の戦後を検討する上で、漢奸裁判は最も注目されてきた分野と言える。

2010年代に入ると漢奸裁判後の協力者の事情、とりわけ中国国外に亡命した協力者の動向についても検討が進んだ。田中剛は内モンゴルの占領地政権である蒙疆政権から日本に派遣された留学生が戦後日本社会にいかにか定着していったのかを検討し、関智英は戦後の日本社会において100名を超える亡命者が暮らし、そのうち複数の協力者の具体的な活動や戦後の発言について検討した。

このように国外に亡命した協力者の実態については明らかにされつつあるが、対日協力者の大部分が中国大陸に残ったことを考えれば、その状況解明は対日協力者のその後を検討する上で不可避の作業である。中国共産党の基準によれば、対日協力者（漢奸）は「黒五類」（地主、富農、反革命分子、破壊分子、右派）の中の「反革命分子」に該当し、人民共和国成立後に繰り広げられた度重なる政治運動に巻き込まれたと考えられる。

こうした政治的迫害については、これまでも個別の事情については伝記などで知られてきた。しかし史料的な制約があり、その実態は依然として不明な点が多い。対日協力者の大部分が中国大陸に残ったことを考えれば、大陸での状況解明は不可避の作業と言える。

本報告では国際日本文化研究センター（日文研）に所蔵されている中国山西省太原市公安局が作成した『日偽山西省政府警務庁資料』（1965年2月）を材料に、対日協力者の戦後の実態に迫らんとした。太原市では1961年前後から文化大革命勃発前にかけて、日中戦争時期に占領地政権に関わった人々の経歴が集中的に整理されたと考えられる。

本資料の大部分は660名の中国人協力者の経歴である。そのうち約半数には比較的詳細に戦後の経歴が記されている。

資料の分析からは大きく次の3点が明らかになった。

1つには、中華民国から人民共和国成立までの山西省の状況、とりわけ「山西王」と呼ばれた閻錫山と日本との関係が対日協力者にも少なからず影響している点である。閻錫山は辛亥革命によって中華民国が成立して以降、国共内戦で中国共産党に敗れる1949年まで、山西の実力者であり続けた政治家である。閻は蒋介石率いる国民政府に参加後も、時に蒋介石と争った。また中国共産党や日本軍とは対立しながらも、自己の基盤を守るためならば状況に応じて提携する政治家だった。閻の行動様式は、単なる「抗日」や「反共」の枠に収まるものではなかったのである。警務庁の成員の中に、戦後、閻錫山の山西省政府で活動した者も少なくなかったのは、こうした閻の対日・対共産党方針が影響していたと考えられる。

2つには、人民共和国による対日協力者（漢奸）の捕捉は、日本敗戦後に中華民国が行った漢奸裁判と比べると極めて広範囲にわたるものだったことである。処刑される者は多くはなかったものの（警務庁の事例では1割前後）、一方で関係者の8割以上が何らかの刑罰ないし拘束を受けていた。

3つには、対日協力者（漢奸）は人民共和国でも社会的に完全に抹殺されたわけではない点である。工場・鉱山や、商業はもちろん、行政部門で職に就いている者も1割強確認できた。社会的に有用な人物は人民共和国でも活動していたのである。また海外逃亡は極めて例外的な事例であることも改めて確認された。

むろん本報告で明らかになったのは山西省警務局という一地方の一部局の事例に過ぎず、安易な一般化には留意が必要である。しかし今後こうした事例が蓄積されることで、対日協力者の戦後の実情に近づくことはできよう。

『日偽山西省政府警務庁資料』は、編纂後も各单位が参照し、必要に応じて訂正や補充を行うべきものであった。もちろん「本資料への掲載＝処罰」ではなかったが、それは政治状況の変化によっていつでも覆される可能性を持っていた。

政治の動向によっては再び自身の過去が掘り起こされ、社会的制裁を受ける可能性が潜在的に残り続けること。これこそが対日協力者たちにとって最も大きな心理的負担であったことは想像に難くない。対日協力者は、日中戦争の当事者であった日本人一般と比べても、極めて過酷な戦後を生きていかねばならなかったのである。